

というクルアーンの言葉をさまざまな宗教同士の教義的つながりの基盤として引用し、「真理を説く神の人」としての「使徒」はすべての宗教に見出せるとしている。さらに、ブッダ・サーハ・釈迦をはじめとする歴史上の宗教指導者たちは、アディブツダ（本初仏）から派生しているとし、包括主義的アプローチを展開している。

次の例は、米国出身でチベット仏教の指導者・研究者であるアレクサンダー・バーズイン（一九四四―）の見解である。彼は神の問題がムスリムにとって大きな重要性を持っていることに注目し、ムスリムとの対話において仏教が無神論であることに直接言及することは避けるべきであると主張している。さらに仏教において神に相当するものとしてアディブツダの概念を導入し、イスラームではアッラーが究極的には人格化されておらず、不可知なる存在であるとされているゆえに、すべてのものの源であり「言葉・概念を超越し、想像できない」アディブツダはムスリムにとって共感しやすいものではないかと述べている。

最後の例は、浄土真宗の僧籍を持ち、英文学および比較文化研究を専門とする学者である狐野利久（一九三一―）の見解である。彼は、アッラーと阿弥陀如来はそれぞれの伝統において唯一の救済者および信者による礼拝の対象であり、形も色もなく、またその属性を表すさまざまな名前を持つという共通点を持つっていると指摘している。さらに氏は、イスラームにおけるアブドゥッラー（神の僕）の概念は「如来の奴隷になる」という浄土真宗の思想に通じるものであり、「イスラーム」と「帰

命」は同じ姿勢を表していると主張している。

これらの見解はすべてイスラームにおける神と、仏教の「真理」を示す概念を同列視するアプローチをとっている。その背景にあるのは、二つの宗教を完全に分ちかねない「神の問題」に挑戦をいどみ、仏教側からそれに相当するものを提示することによって現代における仏教徒とムスリムの間に絆の意識を育もうとする意欲である。このような試みはまだ稀ではあるが、これはグローバル化が進み、宗教間の衝突が続く現代世界の状況に対するダイレクトな反応として出てきた極めて現代的な現象であると考えられる。

一 神教による偶像崇拜批判が意味するもの

若 林 明 彦

宗教の類型化の一つである「一神教」対「多神教」というのは、信仰や崇拜の対象が「一」なのか「多」なのかという単なる数の問題として捉えるのなら、その宗教の本質を明らかにする上で大して役に立たない。実際の宗教は、一神教なのか多神教なのか判別しにくいものが多いからだ。問題は、唯一性を強く主張する宗教にとって、「一」とは何か、「多」であることの何が許し難いのかということだ。一神教においてもその神が偶像などで偶像化されれば多神教以上に排撃されることからすると、結局、一神教にとって許し難いのは「多」ということよりむしろ偶像崇拜であり、唯一性も反偶像からの帰結として捉え

るべきだろう。では、偶像崇拜はなぜそこまで拒否されるのか。

そもそも一宗教であれ多宗教であれ、その「聖なるもの」の観念や儀礼は、人間が共同体(集団社会)を形成して生きて行く過程の中で生み出されるものと考えられる。だとすると、「聖なるもの」(神)との関わりや交わりは、共同体の中で人間同士のそれが元型となっているはずだ(理念としては逆転している)。共同体内の人間にとって、生きる条件にして最大の関心事は、他者との「財の交換」(エコノミー)と「性的交わり」(エロス)だから、人間と神もまた、エコノミーとしての「供儀」(財としての犠牲の贈与、破壊、共食など)とエロスとしての「聖婚」という祭儀によって関係づけられる、と人間は想像する。そして、エコノミーの相手、エロスの相手として神人同形的イメージを喚起する偶像が作り上げられ、偶像崇拜が生まれる。人々はこの偶像との交わりにおいて豊かな富を確かなものにできると信じるのである。

さて、この偶像崇拜が高度に発展した古代オリエントの肥沃地域(エジプト、メソポタミア、パレスチナ)の周辺には、そこから得られる富に与ることができず、また政治的にも抑圧されていた諸々の部族集団がいた。その中から、自らの独立と生き残りをかけて、ある統合理念の下にイスラエル部族連合体が生まれるのだが、その理念とは、「偶像崇拜は富をもたらず」という考え方の断固たる否定、そして物質的繁栄ではなく自由と社会的正義(公正)の回復とそれを実現に導く唯一神への絶対的信仰である。それがヤハウェ宗教、古代イスラエルの宗教の起源である。だから、それは、供儀を含めた祭儀の過剰性を

批判する。また、神と人間との疎通は、聖婚に見られる放縱な性的結合ではなく、「ことば」(ロゴス)による厳格な倫理性を伴った契約によってなされる。

このように、古代イスラエルの宗教は、当時としては突出したロゴス性、倫理性をもった宗教と言えるが、他方で、偶像崇拜に見られるような人間くさいパトスとエロスを内在させてもいる。夫としての神ヤハウェ、妻としてのイスラエルという喩え、ヤハウェと婚姻契約を結んでいながら肥沃神(バアル神)に魅惑されるイスラエルに対して「嫉妬」するヤハウェ。そしてその背信に対する「姦淫」という名の断罪。これらは、古代イスラエルの宗教が本来、捕囚後に排他性を強めていく唯一神教(monothelism)ではなく、他の神の存在までは否定しない拝一神教(monolatry)であることを示すものである。そして、この拝一神教が偶像崇拜(idolatry)の要素を内に抱え込みながらも、それを批判、克服しようとすることの中に、偶像を求めてやまない感受性(パトス)と偶像を錯誤として、抑圧として、疎外として破壊しようとする精神性(ロゴス)との絶えざる相克という人間の普遍的本性を読み取ることができる。

その地(創世記一・二a)は混沌であつたか

野口 誠

創世記一2「そしてその地は(トフ・ワ・ヴォフ)であつた」のヘブル語を関根正雄訳と新共同訳は「混沌」と訳している。